
Zum Teufel der Segen des Engels

椿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Zum Teufel der Segen des Engels

【Nコード】

N2807V

【作者名】

椿姫

【あらすじ】

始まるのは世界の改変。いつかの時代、存在した者達が蘇る。彼らの目的は何なのか。一護が拾った少女とは。彼女が言う、父とは一体誰か。遙か昔、存在した『一護』と『織姫』。二人と、今の二人の関係は。破面、グリムジョーは元死神だった？彼が起こした、最大の禁忌。神殺シとは一体？全ての謎を解き明かすため、一護は過去に立ち向かう。

『胡蝶』（前書き）

いつものことながら捏造多いです。注意！

あと、これは昔書いていた『小さながんばり物語』というのをリメイクしています。

間開け過ぎたら、設定変わりがまくってたので。

よろしければ、どうぞ

『胡蝶』

暗い昏い、闇の中。

堅固な造りの牢屋。

その中にある簡素な机に腰掛けたている少女。

カタリ…

「あら、貴方がここに来るのは久しぶりですわねえ」

ゆっくりと顔を音のした方向へ向けた。

そこに誰かが立っている。

「何か御用ですの？私の感覚が狂っていなければ、まだ四千年ほど私の受刑時間は残っている筈ですわ」

長い間、誰とも話してないであろうによく喋った。

「“魅洩愧”様より伝言です」

「……何ですの？」

「出るとのご命令です」

淡々と、守番は言う。

「…嫌ですわ。私は、隊長達の言う事しか聞きたくありませんわ。確かにあの方のことは好きですけど、それとこれとは……」

「彼が　　―護さんが生まれ変わったそうです。織姫さんも、―
緒に」

「!?!?」

そこで、初めて少女は驚愕の表情を見せた。

「……………なるほど、再始動…という訳ですわね」

小さく呟いた後、立ち上がる。

ジャラリ、と鎖の擦れる音。

ボロを纏い、首と手足には重そうな鎖。顔は泥だらけ。髪も手入れなどしていなかったらしくぼさぼさだ。

けれど、その顔は悪戯を思いついた子供のように無邪気で、そして邪悪な笑顔だった。

「よろしいでしょう。で、私は何処へ行けば？」

「十一番隊へ入れとのことですよ。四席になるよう手配してあるそうですから」

「ああ、私あの隊好きですわ。隊長さんは変わってらっしゃるのかしら」

激しい音を立てて、鎖が外れ落ちる。

足取りは酷くゆっくりしたものなのに、言いかくれぬ威圧感がある。

「楽しみですわね。尸魂界はソウル・ソサエティどう変わっているのでしょうか」

千年振りに外へと踏み出した少女の周りには、

七色の胡蝶が舞い踊っていた

第一話 『山茶花』

黒崎一護。

高校一年生。

髪の色、オレンジ。

瞳の色、ブラウン。

特技、幽霊が見える。

職業 死神代行。

そんな俺の日常に降ってきた非日常。

空から女の子が落ちてきた。

浦原商店に運ばれた少女。

その横で浦原と一護が話している。

「……で、黒崎サン。この人をどこで拾って来たんです?」

「一高の裏山だよ」

「……そうですか」

白無垢の様な和服。

萌黄色の髪。

金色の瞳。

何より、異様だったのは、

少女から流れ出る禍々しい靈圧。

「何者なんだ、こいつ」

「……見当はついておる」

「夜一さん」

猫姿の夜一がふらりと現れる。

「さて、一護。お主はもう帰れ」

「何で！」

「邪魔じゃ。こ奴が目を覚ませば呼んでやる」

渋々と、帰る一護に最後に夜一が問いかける。

「こ奴、見つけた時意識があつたのじやろう？」

なんと言っておった」

「確か……『ごめんなさい、父様』って」

夜一はただ悲しそうに、そうかと呟いただけだった。

数日後。

少女が目を覚ました。

「あなた、ご自分の名前。分かりますかね？」

「……………あ、る……………、アル」

弱弱しく、浦原の質問に答える少女。
暫定的に、アルと呼ぶことにしよう。

「『アル』ですか。何か、覚えてる事はありますか？」
「……分から、ない」

その時、ふと何を感じ取ったのか一護の方をアルが見た。

「あ……」

アルの目が見開かれる。

パクパクと驚いたように口を動かし、呟いた。

「おに…さ、ま…?」

「え?」

「おにい、さま……」

つつつ、と金色の瞳から涙が流れる。

「おい!どうしたんだよ!?!」

「わから、な…っ、でも、会いた…かった…!」

ろくに動かない体を無理に捻って、精一杯腕を伸ばす。
まるで縋り付くように。

子供が母親に縋りつくように。

「おにいさまあ……」

ポロポロ泣いて、一護に縋りつきながらアルは謝る。

「ごめん…なさ…！まもれっ、なく……て、ごめ…なさ…い！
とお、さ…も、か……つさまも…消え…った…！
おね…つさまも……！ごめん、なさ……い……」

そのまま気を失うように、また眠りについた。

「何のことだよ…？」

一護は、ただ呆然とするしかなかった。

「お兄様」

呼んでる。

誰かが、呼んでる。

「一護」

俺を…呼んでる？

「おいで、一護」

「父さん」

父さん…？

この人は…

ああ、そうか。

この人は俺達の父親だ。

「なあ、一護。自由って何だと思っ？」

「うーん……分かんない」

「答えはな

」

聞こえないよ、父さん。

「少しの間、さよならだ」

嫌だ。

行かないで！

* * *

「はっ……！」

目が覚めた。

「なんだ、今の夢」

誰だ…あの人。

「あの人は、けい螢…せいらん青蘭……！？」

何で、名前なんか知ってたんだ？

「父さん……」

しっくりくる。

そう呼ぶことが。

不意に浮かんだ、蒼い髪の男。

「グリムジヨ―…」

呟いて、わかった。

グリムジヨ―は、あの人にそっくりなんだ。
生き写しだ。

…ゆっくり息を吐く。

一つずつ、思い出してみよう。

「父さん…母さん…アル……織姫……っ!？」

井上と同じ名前 ？

「クソ…一体どうなってんだ……」

そんな一護を窓の外から、誰かが見ていた。
闇に融けるように存在し、

ただ、口元を少しだけ上げ、

ニヤリと笑った。

第一話 『山茶花』 (後書き)

山茶花さんぢあなの花言葉は『ひたむきな愛』

第二話 『花忍』

アルが、拾われてから一週間が過ぎた。

「アールちゃん」

コンビニの袋をもった織姫が障子の向こうから顔を覗かせる。

「姫ちゃん…？」

「大丈夫？アイス買って来たよ。一緒に食べよう？」

「うん……」

口数の少ないアルだが、構わず織姫は話しかける。

「このカップアイスにね、抹茶とマーガリンとお好みソースをかけるとおいしいんだよ？」

「そ、なの…？」

「いや、それは美味しくないと思いますが…」

やんわりツツコミを入れる浦原。

恐るべき織姫の味覚。

こんな感じで、二人は仲良くなっているのだが、会った初日にまたアルがボロボロ泣きだしたりした。

その後は何事もなく日々が過ぎて行っているが。

仲良くアイスを食べている二人を見ながら、夜一が小さく浦原に声をかける。

「……………兆候は無いか」

「ええ…全く言っていない程、ありませんねえ」

「気を抜くなよ、喜助。あやつは災いの兆候じゃ」

「分かってますよ」

その二人の会話は、誰にも聞こえていなかった。

「一護さん」

声が、聞こえる。

「隊長を知りませんこと？副隊長でもいいのですけれど」

「父さんと母さんか？さあな。何だ？二人に何か用なのか？」

ああ、これは夢だ。

「はい、少し聞きたいことがありますして」

「？俺でよかつたら聞かせ？」

ずっとずっと昔の。

俺達の、失くしてしまった記憶。

「……………私達の、力のことですの。」

何故、私たちは***と呼ばれるのでしょうか？」

？

聞こえなかった。

「……もうちょっと、大きくなったら話してやるよ」

「もう！貴方は、いつも私を子供扱いなさりますわ！」

誰だ？

お前は 誰だ？

また…夢だ。

「何で……何だ……？」

何で、俺は夢を見る？

父さんは、母さんは、あの少女は、アルは、 織姫は。

俺は、一体何なんだ？

一護の疑問の答えを知る者は、今は、どこにもいない。

「よお、一護」

「何だよ、恋次」

ここは瀟靈廷。

ルキアが様があるというので、一護達現世組もついて来ていた。ちなみにアルもついて来ている。

浦原が

『まあ、外へ行ってみるのもいいと思いますよ。記憶を取り戻すきっかけもあるかもしれないし』
何て言ったからだ。

「そいつ、誰だ？」

「拾ったんだ。記憶喪失だよ。霊体だったから、こっち来たら何か思い出すんじゃないかねえかと思ってよ」

「へえ…」

「あ…アル、です」

ちよつとだけ微笑みながらアルは言った。

「俺は恋次。よろしくな」

「……ん、れー君…よろしく」

「れー君で……まあ、いいけど」

その後、瀟靈廷の甘味処や名所などに恋次に案内を頼んで連れて行ってもらったりして、アルも楽しそうに笑っていた。

そんなこんなで、夕方になる頃には皆くたくたになっていた。

「う…疲れた…」

「俺も、流石に」

「あー、やっと見つけた」

「弓親さん」

向こうから弓親が小走りで近づいてきた。

「ずっと探してたんだよ。で、アルって言うのはこの子かな？」

「ああ。でも、何でこいつのこと知ってたんだ？」

「僕は教えてもらったただけだから。本人に教えてもらえば？」

あ、そうそう。呼んで来てって言われてたんだよ

「誰にだ？」

「うちの四席」

十一番隊舎の長い廊下。

並んだ扉の中の一つ。

「入るよ。火蓮^{かれん}」

薄暗い、室内。

そこに居たのは

「あら、何か御用ですか？」

金髪^{バケモ}の少女だった。

第二話 『花忍』 (後書き)

花忍はなしのぶの花言葉は、『君を待つ』

第三話 『風露草』

「何かって、君が呼んだんじゃないか」

「ああ、そうでしたわね。ごめんなさいですわ」

金髪の中學生くらいの少女だった。

眠たそうな目で、ゆっくりと一護達を見る。

底の見えない、血色の瞳。

「あら…遅かったですわね。疲れている様ですし。ゆっくりしてお行きなさいませ。お菓子もありますわよ？」

特に感想もなさげに、皆に座ることを勧めて来る。

ただ、その目だけは異様な光を放っている様だった。

「私は、みかけ巴影火蓮。ここの隊の四席をしていますわ」

それだけの簡単な自己紹介をして、一度目を伏せる。

「……何故、わたくし私が貴方方呼んだのか。分かってらっしゃいます？」

何も分からない皆を一瞥し、小さく溜め息をつく。

気だるげに、一護の後ろに隠れているアルを見る。

「貴女は、自分が何者かも分かっていない様ですわねえ……」

「あんた、何か知ってんのかよ？」

ぼんやりと、感情の片鱗さえ浮かんでいない瞳が一護を見据える。
そして、帰ってきた返事は。

「ええ、知っていますとも」

ビクリ、と一護の後ろでアルが震えた。

「けれど、教えませんわ。私は、貴女が思い出すまで決して何も話しませんわ」

ガタガタと、怯えながらも火蓮を見るアル。

対照的に、ニコリともせず見つめ返す火蓮。

二人の視線が、数瞬絡んだ。

…先に逸らしたのは、火蓮の方だった。

「……何か、思い出したら来るがいいですね。答えて差し上げますよ」

それからは、文机に向かって何かを書き出し、もう一護達に興味は無いと言っている様だった。

もう何も答えてくれる気はなさそうだと、一護達が帰ろうと部屋から出る直前。

「ああ、そうでしたわ」

不意に、火蓮が立ち上がった。

そして、一護と織姫を見詰める。

今までの、眠そうな目とは違う。

しっかりとした、殺意さえ見えるような瞳。

「もう一つだけ、教えて差し上げますわ。」

れいばんたい
“ 礼番隊 ”

「礼、番隊…？」

「これ以上は、いくら貴方方でもお教えできませんわ。地道に。自力で探してみることですわ」

そう言つて、火蓮は瞬歩で消えた。

「まったく……」

双極の丘。

その崖の淵に座りこんで、火蓮は沈んでいく夕日を眺めながら一人ぼやいた。

「変われば、変わるものですわね…」

いいえ、何も変わらないと言つべきでしょうか…？」

彼女は、一人何を思っているのだろうか。

「頑張つて、思い出して下さいませ。

私、

今もあなたを信じているのですわよ？」

クスクス、火蓮は笑っている。

「まったく収穫なしだな」

「おい、弓親。あいつ、どついう奴なんだ？」

「火蓮？さあ？十四、五年前にいきなり来たからね。長期任務も多い。隊舎に居ないことも殆どだから。彼女の詳しい話が訊きたければ、十三番隊に行きなよ。浮竹隊長と仲良さそうだったし」

「おう、ありがとな」

弓親と別れ、一護はアルに聞く。

「お前、何であんなに怖がってたんだ？」

「……分かん、ない……。でも、怖い……。知られたら……私、はきつと……」

そこでアルは黙ってしまった。

知られたら？

一体なにを？

『そんなの決まってるだろ』

分からない。

『***だつてことだよ』

誰の、声だ？

***の声……？

俺の……声……？

「……………」

誰だ。誰なんだ。お前は、一体 ！

「ちご……一、護……！……………一護！」

「あ……ああ、何だ？」

「何だじゃ、ない………どうか、したか……？」

「いや、なんでもねえよ。で、どうする？浮竹さんとこ行ってみるか？」

「うん……………」

大丈夫。

大丈夫だ。

俺は、俺達は。まだ、普通でいられる……………

「浮竹さん、居ますか？」

「ああ、一護君。なんだい？俺に何か用かな？」

「ええ、こいつのことでちょっと……………」

アルの事を簡単に説明する。

全て話し終わった時、浮竹は険しい顔をしていた。

「……なるほど。理由は分かった」

「で、これが一番聞きたかつたんですけど。“礼番隊”って何なん

ですか？」

途端に驚愕した表情を見せる浮竹。

「その言葉を……一体どこで？」

「十一番隊の巳影って人が」

「巳影か……」

大きく溜め息を吐き、頭を抑える浮竹。

「俺の口からは教えられない。」

そして、その事は誰にも言っちゃダメだ。その言葉は禁忌だから

「

「……………何で？」

不意に織姫が呟いた。

「何で……？禁忌だなんて……昔、お父さんが反乱を起こしたから……！？そうやって、傷に蓋をして、見ないフリをして、傷を悪化させてるのはっ……貴方達じゃないか！」

その織姫の叫びに皆呆然としていた。

言っていることが分からなかったこともある。

だが、浮竹と一護が思ったのは。

何故、織姫がそのことを知っているのかということ。

そして、

何故、一護は織姫の言っていることが“真実”だと分かったのかということ。

「て…あれ…？なんで、あたし、こんな事…？」

織姫自身も分からない。

けれど、自分は知っている。

(あれ…なに…？これは…あたしの、記憶…？)

「一護ー、一護ー！どこ行ったのー？」

「おねえさま？どうかしたの？」

十歳くらいのあたしと三歳くらいのアルちゃんと一緒に居る。
なんで？

「アルちゃん、どうしたの？こんな所で」

「あのね。おとおさまとおかあさまがね、じゃまになるからおにいさまといっしょにあそんでなさいって」

「そうなんだ」

「だからね、おにいさまといっしょにかくれんぼしてたの」

「ふーん。で、一護知らないかな？」

「わたしもね、さがしてるの。いまはわたしがおになんだよ」

ふわりとお花みたいに笑うアルちゃん。

可愛らしくて、何故だろう。不安になる。

もうすぐ、この子の笑顔が見れなくなる

それが、あたしは嫌なんだ…

「じゃあアルちゃん、一緒に一護探そっか!」

「だめ!わたしひとりでみつけるの!」

「でも、もうすぐおやつ時間だよ?」

「む…」

こうやって黙り込むのはお母さん譲りだな。

「……いいよ」

「うん!今日のおやつはお団子だよ」

「おだん!」

嬉しそうに目を輝かせるアルちゃん。

そのまま十二単みたいに重そうな着物を引きずって、早く早くとあたしを急かす。

…あれ?

何で、あたしもアルちゃんも着物姿なんだろう?

まるで時代劇のお姫様みたいな。

「よー、どうした廊下の真ん中で」

不意に体が浮かび上がる。

抱きあげられた?

「お父さん。一護探してたの」

「わたしも」

同じようにアルちゃんももう一方の手で抱えあげられている。ていうか、『お父さん』?

「織姫ー、そういう時は霊圧を探れよな。それ位もつ出来んだろ？」

「ああ！その手があった！」

「…お前ホント馬鹿な」

ニヤツと笑ったのは、黒い着物に白い羽織の青い髪の男の人。
この人は

「井上？どうかしたのか？」

「え、ううん。何でもないよ？」

少しだけ、ぼうつとしてたみたい。

そう織姫は言うけれど、本当はそうじゃない。

けれど、あれが本当の子とか分からないから、何も言えない。

「本当、ごめんなさい。あたし、もう帰りますね」

逃げるように十三番隊舎を後にする。

後ろから、一護が呼ぶ声がするけれど今は一人で考えたい。

そうして、走って走って走って走って

誰かにぶつかった。

「む、大丈夫か？」

尻もちをついた織姫に手を差し出したのは、鴉のように真っ黒な髪
の美女だった。

第三話 『風露草』(後書き)

風露草ふうろうそうの花言葉は『変わらぬ信頼』

第四話 『錢葵』

「む…？お前は確か、旅禍の。どうかしたのか？慌てて」
「あ…ご、ごめんなさい！ぶつかっちゃって！」

慌てて謝る織姫に女性は、微妙な顔をした。

「いや、わたしは何ともないのだがな。

それよりも、お前が怪我しているだろう」

「え…？あ、これ位大丈夫です。慣れてますから」

見れば腕と足を少し擦り剥いていた。

「むっ…」

女性は少し何かを考えた後、尻もちをついている織姫を抱えあげた。
所謂、お姫様だっこと言う奴だった。

「わわわ…！？」

「うちに来い。手当てをしよう」

「え！？いえいえ！そんな大層な傷じゃないですし！」

「…私は、お前に聞きたいことがあるのだ。いいか？」

「え、いいですけど」

状況が分からない織姫に女性は無関心に言った。

「私は、浮竹柑茄^{うきたけ かんな}。二番隊、刑軍に属する者だ」

「ふむ…お前は、誰か“自分で無い誰か”の記憶を見たというのか？」

「はい。信じて、もらえないかもしれませんが…」

「ふむ……」

何か考えるように柑茄は黙り込む。

「名前は……分かるか？」

「名前？」

「ああ、夢に出て来た人間の名前だ」

名前…言ってしまった方がいいのだろうか。

けれど、いつそのこと全部言ってしまった方が楽だろう。それに、何か分かるかもしれない。

「一護」

「一護？…たしか、旅禍に同名の者がいたな」

「はい。あと、アル。……それに、織姫」

「何だと？」

バツと、顔を上げて目を見開いた柑茄。

「お前と同じ名…否、確か昔そう言う者が……」

ブツブツと、何か呟いている。

「……聞いたことが、無い名では無い」

「ほ、本当ですか!？」

こんなにあっさり辿り着けるとは思わなかった。

「だが、これはそう簡単には明かせないのだ…すまない。

“彼女”に許しをもらわなければ……」

「彼女？」

さつきから、微妙な違和感が付きまとう。

この人は、一体何に怯えているのだろうか？

「ああもう!」

イライラしたように髪をぐしゃぐしゃとかく。

「私一人ではどうにもならん!来い!」

「え?」

立ち上がり、歩き出す柑茄に追い縋る織姫。

「どこに行くんですか?」

「大霊書回廊だ!」

「どこですか…?」

「図書館みたいなものだ。遙か昔からの記録が大量に保管されている。本当は入れないのだが、別にいいだろう。」

お前が自分で調べれば、私がとやかく言われる筋合いはない」

歩いていては遅すぎると思ったのか、それとも場所を知られなくなかったのか、柑茄はまた織姫を抱きあげて瞬歩で移動する。

辿り着いたのは、大きな建物の中だった。

体育館ほどの大きさの正方形の床があり、四方が垂直の柵になって大量の本の様なものが収められている。

「さて、手をかざして」

空中に画面とキーボードの様なものが現れる。

「調べたいものを入力してそこを押せ。よっぽどのが無い限り、出てくるはずだ。」

もし画面が赤くなったら私に言え。それは“よっぽどなこと”だからな。私が突破してやる」

「はい。わかりました」

織姫はその画面の前に座る。

柑茄は壁に背を預けて立っている。

織姫は気を引き締めて、検索を開始した。

「あ、あった」

検索を始めて、一時間くらいたった頃だった。

「えっと…」

『礼番隊。王族・夕昏璽魅洙愧が』…』

『礼番隊。王族・夕昏靈魅洙愧が発足した特殊部隊。約二千年前、上流貴族螢家^{けい}当主、螢青蘭^{せいらん}を隊長とし、愧貌^{イノーマティ}を集め、瀨靈廷および王族の守護に着かせた』

イノーマティ
「愧貌？」

『愧貌。読み、“きぼつ”・“イノーマティ”』

「きぼつ…」

『死神在らざる力を持った、異質なる靈魂』

「死神、在らざる力…」

あたしの、『盾舜^{しゆんしゆんりつか}六花』…
あれは、死神でも、虚^{ホロウ}でも、破面^{アランカル}でもない、不思議な力…
あたしは…もしかして…

「もう、見つかったか？」

「あ…はい。ありがとうございます」

「では、出よう。あまり長くいると彼女に見つかる」

「すみません。お風呂まで貸してもらって…」
「構わない。服は…大きかったな、すまない」
「いいえ、ありがとうございます」

今日は、柑茄さんのお家に泊めてもらえることになった。
一応、黒崎君達には言っている。

「で、なにか分かったか？」

「…はい。あたし…もしかしたら、愧貌かもしれない…」
「…ああ。あたりだ。お前は、愧貌だ」

そう、断言されてもそんなに驚かなかった。

「でも、あの記憶については、分からなかった…」

「ゆっくりで、いいと思うぞ。まだ、時間はある」
「はい」

私は、そのまま布団に入った。

寝たら、また記憶を見られるかな…

ああ、これは記憶だ。
よかった。見れた。

「おーい、湾李^{わんり}」

「なんだ」

「ガキ寝た。頼む」

小さなオレンジ髪の男の子。

黒崎君？

それに今、湾李って呼ばれたのは、ウルキオラ？

なんで、皆似てるのかな…？
もしかして、似てるんじゃないかと。
同じなのかな？

「全く…一護はまだ小さいんだから無理をさせるんじゃない」

「させてねーよ。一緒に遊んでただけだよ」

「お父さん」

「んー、何だ織姫」

小さなあたしが話しかけてる。

「修行、付き合っつて！」

「あー…ごめん。今日は無理だ」

「何で！」

「えっらい人に呼ばれてんだよなー。だから明日な」

「むー…」

あ、膨れてる。

小さな子供って素直だな…

「…来い、織姫。今日は久々に現世の話をしてやろっ」

「現世の話！」

一瞬で、顔が輝いた。

単純だな。

「ああ。一護は寝てしまったから…こぼく虚珀にも聞かせてやろっ」

「うん！」

虚珀？

また、新しい人だ。
一体誰？

広いお屋敷の中の一つの部屋。
中には布団が敷いてあって、真つ白な子供が寝ていた。
黒崎君に、そっくりな真つ白な子供。

「あ、おかあさん！」

まだ舌つ足らずな声。

飛び起きるように上半身を起こす。

「こら、無理に動くな」

「はい。ね、ね、おかあさん。きょうはなにをするの？」

「現世の話だ」

「おねえちゃんも、いつしよにいてくれるの？」

すごく、嬉しそう。

この子は、どうしてこんな所にいるんだろう？

「あのね、あのね、さっきねみずきおねえちゃんがきてくれたの」

「へえ。で？」

「おかしくれたのー！いつしよにたべよ」

みずき……魅洙愧？

王族の、人？

知り合いだったのかな？

「そうだな…現世には」

とつとつ
訥々と、語り出すお母さん。

二人とも、すごく嬉しそう。
それを感じる。

お母さんから『愛しい、愛しい』って。
すごく、子供たちを愛してるんだって。
それが嬉しい。

何だか、すごく心配になる。
この平穩は、もうすぐ壊れる。
それがあたしは怖いんだ……

「どうかしたのか」
「え？」

びっくりして食べていた朝ごはんを嘔き出しそうになった。
ちなみに朝ごはんは完璧な和食。あたしが起きた時には出来ていた。
(この人、何時に起きてるんだろう?)

「元気がないようだが」
「ううん。何でもありません」
「そうか」

柑茄さんの声は淡々としたままだったけど、パリパリと焼き魚を無
意味に裂いてる。
何だか、動揺してる？

「……気をつける。」

お前は狙われている。私は、なるべく助けたいが出来そうもない。
黒崎一護から離れるな」

一息にそれだけ言って、黙々とご飯を食べる柑茄さん。
……なんとなく、その通りだと思った。

あたしは狙われていて。

それはあの夢と関係があつて。

それは黒崎君達も例外は無くて。

グリムジョー達も含まれてるんだ。

第四話 『錢葵』(後書き)

錢葵せんきの花言葉は『母の愛』

第五話 『花盲蒲』

「ここまでで、平気か？」

「はい。大丈夫です」

「……危なくなったら、必ず助けを呼べ。必ず誰かが助けてくれるはずだ」

頭を下げて、帰っていく織姫を見送る柑茄。

角を曲がって見えなくなった所で。

「怒られても知らないよ」

「月檜……」

影から浮き出たように、柑茄の隣に金髪の美女が立っていた。

月檜と呼ばれたその美女は、なんとも言えない瞳で柑茄を見ている。

「彼女に教えたことが“彼女”にばれたら、君はただじゃ済まないと思うよ」

「分かっている。けれど、何も教えないのは、非道い」

「まあ、僕もそうは思うけど……」

ゆっくりと手を伸ばし、柑茄を抱きしめる。

「僕達は、忘れちゃいけない。僕達が『生かされている』ことを。

“あの人達”にとっては、僕達は何の価値も無い、取るに足らない存在だっということを。

自覚しなくちゃ。思い知らなきゃ。じゃないと、

捨てられた時、耐えられなくなっちゃう。

平坦な声で、無表情で、けれど静々と涙を流しながら。月檜の言葉に柑茹も同意するように抱きしめ返した。二人は暫くの間、そのまま無言で抱きあっていた。

「莫迦ですわねえ…二人とも」

抱き合って泣いている二人を少し離れた建物の上から見下ろしながら、火蓮は溜め息をつくようにそんな事を言う。

「何があるうと、隊長が私たちを捨てることなどありはしませんわ」

そうだ。

そんな事がある筈がない。

そうだったら、千年前負けた筈がない。

『絶対に誰も殺すな！』

最後の一兵にまでそれを徹底させた自分達の、愛すべき隊長は、その情を捨てれば勝てたかもしれない戦いを、その情の所為で負け、消えて行った。

「分からない。ものですわ」

あの人はとても強かったのに。
ただ、とても優しかった。
その所為で

「泣きたいのは、私も同じですよ…」

「井上、お前いきなり知らない人の家とか泊るなよな」

「…えへへー、ごめんね。心配かけちゃって」

「浮竹つて、浮竹さんの妹かなんかか？」

一護がルキアに訊く。

「ああ、確かそうだ。だから、心配はない筈だが」

「いい人だったよ」

「そうか。では、現世に帰ろう。あまり長居する訳にもいくまい」

6人が、せいれいもん瀟霊門を通る時後ろから物凄い突風に乗って、七色の蝶の群れが通り過ぎた。

「わ、凄い…」

思わず織姫が呟いた。
その隣で、アルは。

「火蓮、ちゃん……」

一筋涙を流した。

「火蓮ちゃん、火蓮ちゃん」

「何ですの」

「この前、虚圏ウソコトに行ったんだけどね」

「何やってるんですの!？」

「…行ったんだけどね」

「普通に進めるんですの!？」

ああ、やっぱり火蓮ちゃんは面白いなあ。

ちゃんと、ツツコんで欲しい所にツツコんでくれる。

「嘘々、ホントは現世に行って来たんだよ」

「それはそれで問題ですけど…」

「でね、凄いもの見たんだ」

「何ですの?」

「一面の、お花畑」

色とりどりの花が、沢山咲いてて、すごく綺麗だった。

火蓮ちゃんにも見せてあげたかったな。

「凄かったよ。滯霊廷じゃ見られないもん」

「へえ…それはよかったですわね」

うん。

よかった。

「ねえ、火蓮ちゃん今から甘味食べに行こ！」

「まだお仕事が残ってますわ…て」

「いいからいいから！」

「よくありませんでしてよー！！」

火蓮ちゃん。

火蓮ちゃん。

ああ、大好きだよ。

私の、親友。

「う…ん…？」

暗い、和室で目を覚ます。

ここは、どこだっけ…？

「お父様…」

指折り、数えていく。

「お母様、お姉様、お兄様、琥珀お兄様、魅洙愧お姉様…火蓮、ち
ゃん」

私の、大切な、大切だったはずの人達。

分からない。
思い出せない。
顔も、記憶も、何もかも。
誰なのだろう。
皆皆、思い出せない。
苦しい。

「誰か…助けてっ」

助けてくれる人なんて、いるわけがない…

「おい」

「何だよ」

「よかったのか。アルを現世あひだに置いて来て」

黒髪の、白い衣装を着た女が訊く。

「問題ねえ」

青い髪の男が平坦に答えた。

二人がいるのは、死を椅子など夜が永遠に続く世界、
虚圏ウエコムンドに在るド
ーム 虚夜宮ラスノーチェスの外殻がいかくの淵だった。

「あいつは死なねえし、誰も死なねえ。

誰もあいつを傷つけられはしねえ」

「そう、かもしれないが…」

「心配すんな。滯靈廷には火蓮がいる。月檜も柑茄もいる。現世には一護や織姫がいる。大丈夫だ」

まだ、心配そうな女を男は優しく抱きしめた。穏やかな時間。

「帰るぞ。あまり遅いと藍染様に怒られる」

「おう。藍染様に…ね」

どこか含んだ言い方をした男 グリムジョーは、女 ウルキオ
ラと共に響転ソニードで消えた。

小さな、青い花を残して。

第五話 『花苜蓿』 (後書き)

花苜蓿の花言葉は「優しい心」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2807v/>

Zum Teufel der Segen des Engels

2011年11月20日19時29分発行